

示されなければ、文法としてはやはり欠陥があるのではないだろうか。つまり (1)-(6) のようなドイツ語にとって無標の文と (7) (8) のような有標の文とは、文法によっても異なる扱いを受けるべきだと思われる。Beckman は1つの文法規則の対象領域を広げることを目的としたのだけれど、対象領域すべてを同じ方法で扱うことが常に正しいとは限らないのである。

(1)-(6) と (7) (8) が有標性に関して異なるとすると、基底構造の語順としてまず考慮すべきなのは (1)-(6) の文のみであり、(7) (8) は文体的な規則で扱うことになる。つまり (7) (8) は VSO 説を支える根拠としては弱いのである。

もっとも、有標性理論の欠点は、有標と無標とを区別するはっきりした基準がないことである。ここでドイツ語としては基本的な文に属すると考えた (1)-(6) にしても、(2) の受身文や (4) の決定疑問文はその他の文と比べてやや有標性を持っているかもしれない。VSO 説は決定疑問文や命令文の語順をもとにしてすべての文を派生させようとするのであり、この点も問題があるように思われる。

7. Beckman の本は、やや古い理論によって、過剰な生成能力を持たない簡潔で明示的な文法を書こうとした試みの1つである。不十分な点もあるが、その後の理論の発展によって解決できそうな点もあり、また検討を要する点も多い。この本は、ドイツ語の語順をめぐる問題を扱う場合、注目すべき本ではある。しかしこの複雑な問題は Beckman によって解決されたとは言えず、相変わらず SOV 説がやや有利という状況には変わりがない。まだまだ論争は続きそうである。

注

1. McCawley, James D.: *English as a*

VSO Language, Language 46 (1970)

2. Berman, Arlene. On the VSO Hypothesis, *Linguistic Inquiry* 5 (1974)
3. Lederer, Herbert: *Reference Grammar of the German Language*. Based on "Grammatik der deutschen Sprache" by Dora Schulz and Heinz Griesbach, Charles Scribner's Sons (1969)
4. Thiersch, Craig L.: *Topics in German Syntax*, Ph. D. dissertation, MIT. (1978)
5. Chomsky, Noam: *Aspects of the Theory of Syntax*, The MIT Press (1965)

Barbara Joe Beckman: *Underlying Word Order—German as a VSO Language*

Peter D. Lang 1980

John Worthen: *D. H. Lawrence and the Idea of the Novel*

井上 義夫

D. H. ローレンスの文学と思想に関する研究が、現在に於るような隆盛を見るのは、彼の死後 30 年余りを経た 1960 年代以降のことである。それ以前の時期の批評家、研究者は、ローレンスがまっとうな文学者であることを広く社会に対して立証しなければならないという、他の偉大な作家の場合とは異なる課題を第一の課題として負わねばならなかつ

た。このような特殊な文学風土を生む上で、T. S. エリオットと M. マリの果たした役割には絶大なものがあったが、1955年に F. R. リーヴィスの *D. H. Lawrence: Novelist* が上梓されたとき、ローレンスの研究者は、この才能豊かな二人の文学者の流した害毒からローレンスを浄化するという、奇妙な要請を免れることになった。リーヴィスは、ことローレンスに関する限り、最も困難な闘いを最後まで闘いぬいた批評家であった。彼によって初めて、ローレンス研究の礎石が基づけられたというのは、おそらく異論のないところである。

しかしリーヴィスのローレンス批評の特徴は、専らこの作家の「健全さ」を強調するところにあった。人生に対するローレンスの健全な態度を、詳細なテキストの検討により執拗なまでに説くのがリーヴィスの方法である。それは、ヴァージニア・ウルフやジェイムズ・ジョイスを高評しないこの批評家の基準に叶うものであり、彼の批評原理は終始一貫しているが、他方ローレンスという人は、謂わば異常なまでに健全な人であった。生に対する彼の健全な本能は、「復活」に執着したその態度にも窺えるように、死をいかくぐって はじめて体得され培われた。凡そローレンスほど、「健全さ」の裏に戦慄する死の冷気を漂わせている現代作家も珍しい。『異神を追いて』(*After Strange Gods*)の T. S. エリオットは、いち早くこの非人間的要素の存在を認めた上で、ローレンスを曲解してもなお読者からこれを遠ざけようとしたとすることができる。

ローレンス攻撃の矢面に立ったリーヴィスは、それ故ローレンスの一面を抽象することによって彼を弁護した。篤実なリーヴィスが、弁護のための方略としてそうした筈はないから、過度なまでに倫理的な感受性の持主であったリーヴィスに、ローレンスの「健全さ」

を支える「暗部」が見えなかったというのがおそらく真実に近い。

爾来、ローレンスのこの両面を、いずれにも偏することなく描き尽した批評書は皆無に等しい。1980年に一卷本としてまとめられたヘンリー・ミラーのローレンス論 *The World of D. H. Lawrence* は、成程ローレンスの実像を捉えており、この書がローレンスに関する空前絶後の書であることに疑いの余地はない。しかしこの著作は、ミラーのランボー論 (*The Time of the Assassins*) と同様、ローレンスの本質が解ればミラーの文学も解り、ミラーが解ればローレンスも理解できるという循環の中に読者をひきこむ。つまりそこには、読者にとっての理解の「階梯」がないのである。

しかし乍ら1960年代以降、ローレンスの文学と思想に独自の問題意識から接近する研究書は、年を追うごとに着々と公にされてきた。マックス・ウェーバーの妻マリアンヌの死後、ウェーバーに関する資料の公表を許された Martin Green の著した *The von Richthofen Sisters* (1974) と、第一次大戦中のローレンスの思想の変化を詳細に跡づけた Paul Delany: *The Nightmare of D. H. Lawrence* (1978) は、伝記的事実から出発し、ローレンスの一面にユニークな光を当てたものである。Edward Carpenter の思想とローレンスのそれとの類似性を指摘した Emil Delavenay の *D. H. Lawrence and Edward Carpenter* (1971) は、特に『虹』『恋する女』執筆時期に於る思想形成の過程を知る上で貴重である。或いは、『恋する女』に至るまでの長編小説を分析した Stephen Miko 著 *Toward Women in Love* (1971) は、先行する諸批評、諸議論に立脚し、ローレンスの諸作品に深い洞察を与えている点で、現在に至るローレンス批評の一頂点を形づくると言っても過言ではない。

ここに取上げる *D. H. Lawrence and the Idea of the Novel* の特徴は、著者の主たる意図がローレンスの作品の解明自体ではなく、ローレンスの小説観と小説の質が、時代とともにどのように変化したかを闡明する点にある。創作活動に対する一人の作家の抱負が、その作品を受け容れる社会の要請との関りの中でどのような変質を蒙らざるを得なかったかを、作品に即して跡づけるところにある。そこでは、各々の作品は、作家の経験と信念とその表出の問題としてのみならず、作品を受容する社会の状況と作家の問題としても論じられる。時代は、作家の経験と確信の質を左右するばかりでなく、作品の市場価値についての予測を有無を言わせず創作の前段階に挿入することによって作家を「強い」る。さらには作品完成後も、出版社の reader 或いは編集者は、作品に対する需要として現れる各々の時代の文学観を作家におしつけることで、「時代」の代弁者となる。

来るべき時代を先取りする文学が読者の既成の価値観に依存することはできず、自ら読者を開拓しなければならないとすれば、ここには、芸術家が一般社会から追放された観のある現代に於る芸術家の運命が、最も鮮明に現れる筈である。The Egoist 誌の刊行者 Harriet Shaw Weaver 等による送金を得て『ユリシーズ』執筆に専心しえたジョイスとは違い、後援者による金銭面での援助も家産ともに皆無に等しかったローレンスの小説は、痛ましいまでに「現実」の波をかぶった。他方、偉大な作家はつねに現実強いられつつ逆に現実を先導するものであるから、ローレンスと社会との関りを見ることは、芸術家の栄誉と恥辱の双方を通覧することにもなる。

このような観点からローレンスの生涯を見るとき、各々の作品はどういう様相の下に現れてくるか。著者 John Worthen は、ローレンスの長篇小説を全て取上げ個々の作品の

もつ意味を明らかにする。例えば事実上の処女作である『白い孔雀』は、Worthen によれば、自己自身と周囲の人々に対し作家としての自己を証明したいという願いから書かれたと説明される。それは、文学に憧れた青年の単なる願望ではなく、家族に対しては作家として世に出ること、自らに対しては私的な意識の世界に公に受容される形を与えるという願いに他ならなかった。その場合作品は、「小説」がどんなものでなければならぬかについての若きローレンスの先入見に基づいて書かれたから、この作品についてしばしば指摘される短所は、実は作者の執筆動機に由来することが明らかにされる。即ち『白い孔雀』の登場人物の属する階層が、現実の作者が属した下層階級から中産階級に移されたこと、過度に象徴的な表現が作品のリアリティを稀薄にしていること、等の弱点がそれであるが、これらの弱点の拠ってきたところを、当時のローレンスの「必要」に求めることは、作品をそのまま作者に結びつける傾向の強いローレンス批評に於ては特異なものである。第二作『侵犯者』も、ローレンスの初期の詩に窺えるマンネリズムを感じさせる作品である。が、当時既に短篇小説に於ては数等優れた作品を書いていた作者が、自らその欠点を知りつつこれを出版した背後には、特殊な事情があったとされる。1911年12月に肺炎に罹った後、小学校教師の職に戻る意思をもたなかったローレンスには、作家として身を立てる道を考えざるをえなかったという事情がそれである。『侵犯者』出版にまつわるこの経緯は、ローレンスの文学全体に占めるこの作品の位置を自ずから明らかにしてくれるものである。『息子と恋人』を論じる Worthen は、数度の改稿の意味を詳細に検討する。この検討はそれ自体興味深い、working class の小説を望んだ Ford Madox Ford の期待とは別に、1912年頃のローレンスが、芸術

によって何をなしうるかについての予感を抱き始めていた、という著者の指摘は更に興味を惹く。即ち、英国国民のために小説を書くという新たに芽生えた自覚がそれであるが、この自覚はローレンスに、「見者」「予言者」としての道を辿らせる端初ともなったからである。このような自覚の必然的帰結として『虹』をめぐる E. ガーネットとの訣別という象徴的事件を説明することは、なるほど説得力のある説明である。『虹』執筆中にローレンスは、あるがままの読者のための小説ではなく、読者に先んじその意識を変えるための小説、社会の先鋒としての小説を書く抱負を抱いたと Worthen はいうのである。この抱負は以降、『チャタレー夫人の恋人』に到る迄、作を追って先鋭化し、同時にこの作家を一層社会から孤絶させたものである。Worthen は、“leadership-novels”の名で一括して論じられがちな『アーロンの杖』以下の三作についても、各々の作品の特質をよく指摘し得ている。例えば『アーロンの杖』は、第一次大戦後の作者の、「既知の社会の外でどのように一人の個人として生きるか」という問が切実な形をとったものであり、『カンガルー』のローレンスは、「成功を博する小説を書き続けようとせず、真率な小説を書こうとした」と言う。それは、第一次大戦のもたらした「死の波」——「人の信念と人間関係と共同体と社会に打ちよせた死の波」——の余波をうけた一個人が、「自己の経験に忠実たらんと思ひ定めた小説」であったと説かれるのである。この観点から、一般には『カンガルー』の瑕瑾とされる「悪夢」の章も弁護されるという具合である。

以上この著作の内容を瞥見したが、各々の長編小説のもつ意味を明らかにする Worthen は、ローレンスの生涯と個々の作品の成立過程についてこの上なく精通している。大方の予想に反し、ローレンスは自らの作品を可能な限

り改稿し、雑誌等に掲載された後にも全ゆる機会に推敲の筆を加えた作家である。その草稿の類が本の体裁をとって出版されたのは、現在なお、数冊を数えるに過ぎないが、この研究書の著者は、テキサス大学、ハーバード大学等の所蔵する未発表草稿にも精しく、ローレンスに関する研究書をも十分に参照した上で、しかも俗見に囚われない視点から自らの説を披瀝しているのである。

この書は謂わば、ローレンスの著作とその生涯に関する歴大な記述の山に、一步一步着実に登った努力の書である。その登攀の仕方に衆目を愕す鮮やかさがあるわけではないが、他方そこには、「研究者」の隠れ蓑である「没個性」という無責任な態度もない。ごく普通の才能と自らの切実な問題意識をもったローレンスの研究家が、他の人には不可能な道を切り拓いたつつましい先陣の姿は、やはり或る感慨を催させずにはおかぬのである。

John Worthen: *D. H. Lawrence and the Idea of the Novel*, 1979, Macmillan

Martin Green: *Dreams of Adventure, Deeds of Empire*

山 本 和 平

これほど刺激的で目の詰んだ研究はそうざらにあるものではない。四百ページを超える大作なのに、いわゆる博士的大著のカビくさ